

日風集

第18号 1996年1月1日

〈高知県立歴史民俗資料館だより〉

古文書の総数と個人の限界

大野 充彦

これも性格なのでしょう。か、私は生の史料に接する時、いつも自分の非力さを感じ、気が減入ります。

一般に古文書の調査は、文書の発給年月日、差出所、宛所、内容、史料形態などを一点ごとカードに摘記するものですが、無年紀文書の場合、年次の確定にまず一苦労します。

とりわけ時候の挨拶状のようなものになりますと、文書内容の具体性が乏しく、内容からの年次推定が難しくなります。重要な人名や事件を多少理解していたとしても、この種の文書の前では無力に等しく、「読史備要」や『徳川実紀』など参考文献を駆使しても、結局は「年未詳」として処理しなくてはなりません。自分の非力、非才を痛感するのはこんな時です。

文書の性格や調査方針にもよりますが、右のような事情のため、一日に処理できる量はせいぜい五点、十点ということになります。十日間没頭しても百点、それも過半は「年未詳」、そう思うだけで気が減入ります。

現在、山内家宝物資料館が伝える山内家（土佐藩主）文書は、山内家史料、

「長帳」文書、幕府発給文書、近代家政史料に大別されます。総数は三万点以上です。概要は別の機会（当館企画展「土佐藩主山内家の名宝（一）」講演会、一九九六年三月二日）にお話し

ようと思いますが、調査（一九八七―九〇年実施）にたずさわり、改めて感じたことは、①十七世紀後半に文書数が急増すること、②文書数に比し「年未詳」が少ない、という点です。

①の大名家文書の急増現象は、おそらく文治政治とよばれる時代背景と無縁ではないと思います。文治政治は武断政治が転換したものと理解されるのが一般的ですが、文書の授受レベルでいえば、儀礼が重きをなす政治であったわけで、贈答関係の史料が想像以上に多く残されています。

この種のもものは、最初に述べました無年紀の、しかも年次推定が困難な文書ということになるのですが、山内家文書は、一点ごと文書の包紙に、今の調査カードに相当する内容が記されています。その包紙には、文書の整理、調査、補修を担当した東野弥一兵衛や萱野又兵衛といった人名も記されています。

ました。藩政史上はまったく無名の人物なのですが、彼ら先人のおかげで、②の「年未詳」文書が少ないという、おそらくは全国的にもめずらしい特色を今我々は享受できるのです。

大名が一年間に受け取る文書は何点ぐらいあつたのでしょうか。幕府からは老中奉書や御書付などが数十―百点前後発給されていたとおもわれます。家中や、諸大名からのものを加えますと、おそらく数百点になるでしょう。

当然、領内支配に関する雑多な史料も数多く作成されたはずですが、これらが毎年たまっていくわけですから、東野や萱野などの苦労は想像に余りありません。

ただ、彼らの仕事を仔細に検討しますと、幾多の調査も完結した例はなく、また原本の所在不明の例がみられるなど、問題もあります。戦前に活躍した沼田頼輔（山内家史料編纂者）や山崎直衛（「長帳」調製者）の仕事もそうです。我々の調査と同じことです。

山内家文書の調査では数々の知見を得ました。ひとえに先人のおかげだと思います。しかし、我々を含め、今までの史家は山内家文書の、数万という文書数に負けていたのかも知れません。本格的な調査が今後企画されることを望むものです。

（高知学芸中学高等学校教諭）

企画展 『土佐藩主山内家の名宝Ⅰ』 によせて

下村 公彦

はじめに

旧土佐藩主・山内家に代々伝わる貴重な歴史資料や書画・美術工芸品を県民共有の文化遺産として後世に伝えるため、山内家は所蔵品の大部分を高知県に寄贈・寄託し、一部は県が順次購入することになった。昨年十二月から山内家十八代当主・豊秋氏と県とで進めていた交渉が十三日までに大筋で合意した。山内家側は十五日から、専門家による所蔵品の整理とリストアップ作業に入る。

県は新たに財団法人を設立するとともに、七年度予算案に購入経費の一部を措置し、四月の機構改革で発足する予定の文化環境部の目玉事業にしたい考えだ。

右の文は、平成七年一月十四日付『高知新聞』のトップ記事である。当館では、この壮挙を記念して企画展『土佐藩主山内家の名宝』を二回連続して催すことになった。その第一回は本年二月九日から三月二十日まで、第二回は四月十九日から五月十九日までの予定で、現在(財)土佐山内家宝物

資料館に所蔵されている資料群から名品をえりすぐり(寄贈品を優先しながら)展示しようとするものである。

第一回企画展の概要

第一回企画展では、まず初代一豊から十六代豊範に至る歴代藩主関係の遺品と事績を紹介し、土佐藩政期を振り返ることに主眼をおく。分野別には、古文書・武具・能面・書画の類に

比重をおいている。(第二回は漆芸品・茶道具などを中心とする予定)

〈古文書〉 江戸幕府発給文書全九、七五五点(点数は「土佐藩主山内家歴史資料目録」による。以下同じ)のうちから、山内一豊宛徳川家康御内書、山内豊隆宛徳川吉宗領知判物・同日録、老中奉書などを展示し、藩主関係文書(全一七、五五五点)では慶長六年末の一豊書状や、いわゆる「長帳」の一部を紹介する。一豊の書状は土佐入国直後の領内の緊張状況を伝えるものであり、「長帳」は山内家の御手許文書の通称で、周知のように土佐藩政関係の基本史料群である。



初代 山内一豊画像



「長帳」(御手許文書)甲第1~5号

〈書画〉 絵画では全二百余点のうちから、山内一豊・忠義・豊熙・豊信・豊範等の画像、藤並神社御神幸絵巻などを抽出、書では山内忠豊筆田窓和歌以下藩主の手になる書や、中国(清)の書家鄭燮の作品なども展示する。

〈能面・染織等〉 能・狂言面では全一四九点の中から古元休作石玉尉などの名品八点を選んでおり、能装束(厚板)や火事装束も列品する。また、昨年の寄贈資料中の目玉である錦旗(菊御紋の旗)も紹介する。これは、周知のように戊辰戦争(一八六八年)の際、薩長側(官軍)にくみした土佐藩に対し朝廷より下賜された歴史的遺品である。



かわづつみだんがえすがけおとし
章包段替素懸威二枚胴具足
(11代山内豊興所用)

へ武具・漆芸品等） 刀剣でも戊辰戦争に絡んだものを展示する。刀（銘廣利）附金梨子地糸巻太刀拵がそれで、鳥羽・伏見戦後に下賜されたものである。また、甲冑では山内豊昌・豊房・豊興らの遺品を、漆芸品では美しい蒔絵のほどこされた小鼓胴や雛道具、そ



能装束（花入り菱に禪文様厚板）

れに望遠鏡や渾天儀を列品する予定である。さらに、二代忠義所用と伝えられる丸三柏紋蒔絵腕や古瀬戸耳付茶入（御拝領瀬戸肩衝）も注目される資料である。

おわりに

昨年一月十六日付『高知新聞』社説は、「山内家の文化財寄贈は県民の喜び」と題して次のように言っている。

——三万点以上の文化財が今日までまとまって保存され、しかも学術的な分類作業も県と山内家の協力で実施されている。土佐の歴史資料としての位置付けも完了しているのである。山内家がこれら文化財を単なる美術品と考えるなら、税金を取られても古美術商などに売ることができたはずだ。藩主の家系の誇りも無論だが、豊秋氏が「公人」としての自覚を



見性院（山内一豊夫人）画像

持っておられたことが、散逸を防いだのではないか。——

後段については社説のとおりであろう。ただ前段については（昭和六十二年度からの山内家歴史資料調査に係った者の一人として）少し付言させて頂く。確かに文化庁補助事業としての資料調査は平成三年三月をもって「完了」し、目録も刊行された。しかし、同目録の中で調査員各位が指摘されて

いるように、本調査は多くの課題を残している。いわゆる「長帳」一五九冊（千五百余点）の悉皆調査などが、その代表例である。この一つを「完了」させるだけでも、多くの専門職員と長い調査期間が必要である。（財）土佐山内家宝物資料館の人員体制の一層の強化が、保存施設面の拡充とともに急務である。（これは弊館にとっても同様である。）

なお、先の資料調査で主力を務めて頂いた大野充彦氏には「山内家文書研究の意義と課題」と題した講演をお願いしている。（三月二日午後二時半）。「学術的な調査」の「完了」とは具体的にどういふことなのか、詳しく御教示頂けるものと期待している。最後に、今次企画展開催に際し全面的な御協力を賜った山内家および宝物資料館の方々にあつくお礼を申し上げて、企画展の紹介文とさせて頂く。



錦旗（菊御紋の旗）

福吉 要吉 さん

今回は、平成五年に「かさぼこ」の調査でお世話になり、そのまま当館の資料調査員をお願いしている福吉要吉さんにご登場頂いた。

郷土史に興味を持たれたきっかけからお話し下さい。

「とにかく好きじゃったということですね。社会科が専門だったせいもあって、若い頃から地域の歴史なんかに興味がありました。それと不思議な縁もありました。僕が校長として赴任した学校が、相次いで百周年を迎えましてね、何か運命のようなものを感じながら百年誌をつくりました。百年誌言うても、卒業生名簿だけでなく、校区



の歴史などもなるべく多く入れたから、随分勉強になりましたよ。」

弘見小学校時代に、「ミニ郷土資料館」をつくられたそうですが…。

「あれは昭和四十七年のことだったと思います。学校に空き教室があつたもので、ここへ町内の民具を集めて展示したら面白いなあとひらめきましたね、教育委員会や校区のPTA、こども達にも呼びかけて、収集に協力してもらいました。最終的には、三百五十点ぐらい集まったと思います。社会科の生きた教材として授業に活用したり、参観日の時などには、地域の人達にも見てもらいました。当時、学校で民具の収集などをやっている所はあまりない時代でしたから、新聞にも大きく取り上げられました。その後、せっかく集めたんやから、町立の「民具（資料）館」をつくらえと町に提言したのですが、残念ながらこれはだめでした。」

福吉さんの収集された大月町内の資料の中には、大変珍しく、現在どこにも残されていないものもあり、氏の先

見性を伺うことができる。

本年度刊行された『大月町史』についてお話し下さい。

「これは、資料館の話がなかなか進まないので、かねてからその代替として町に申し入れていたもので、当時の町長が、大月町制三十周年記念事業に組み込んでくれました。これは、町長の大英断じやったと思います。

僕は、若い頃から郷土の歴史に関するものを色々と研究し、執筆もしてきました。例えば、昭和三十五年『こまめ史』（ガリ板刷）、昭和四十五年『一切小学校百年誌』、昭和五十一年『弘見小学校百年誌』、昭和五十五年『姫ノ井小学校百年誌』、昭和五十八年『漁業誌——荒波越えて』、昭和六十一年『大月の昔ばなし』（第一・二集）などです。こうした郷土史研究の下地があつたから、町史編纂の必要性を感じたのも、ごく自然の成り行きでした。この本は、昭和六十二年から平成七年までかかった労作じやつたが、最初の三年間は摺り鉢の底をグルグル回りよるような感じやつたです。とにかく、何から手を付けたらえいか分からなかった。まず、地元のを発掘しようと思うて、寺社や旧家をよくまなく訪ねたけれど、月山神社の資料や、小才角で庄屋文書を発見した以外

は、これといった収穫はあまりなかったです。仕方がないのでぎつちり高知へ通いました。県立図書館や市民図書館、山内神社宝物資料館（現土佐山内家宝物資料館）などへね。特に、県立図書館の高橋・森口両先生と土佐女子校の竹本先生には、いつもご指導・ご協力をいただきました。また、「考古編」の執筆では、木村剛郎氏にもお世話になり、忘れることのできん、ありがたいことだと思っております。

町史が形になつてきたのは、そう五年目ぐらいやつたかな。目次の組み立てだけで、八回もやり直した程です。途中で心臓を患うたりして、「もう、やめたい」と思ったこともあつたけれど、「後世の人に何とか地域の歴史を残したい」の一念で頑張り抜きました。そして、忘れませんが、平成七年三月のある日、東京から一冊だけ僕宛に本が届けられました。その本を、僕は迷わず神棚へ捧げましたよ。苦勞と努力の連続じやつたが、これでやつと町史が陽の目を見ることができたという安堵感からでしたけど…。

本の反響はどうですか？

「うーんはつきり言うて、可もなくば不可もない、といったところかねえ。そりゃあ、大きなミスもあつたけれど、集められる限りの資料を使って、今の

時点ではいいものができたという自負はあったが、発刊直後は正直言うて不安じゃった。町内の人から間違いを指摘されやせんかとね；でもこれまでそういう指摘はほとんどありません。町民の反応を一番知りたかった僕としては、一応、安心はしたものの、何となくさみしい気がします。ただ、名も知らない町外の方々から、「中央の資料を丹念に調査・分析して引用され、注釈も丁寧、しかも、写真や図表も多くて分かりやすい」と心のこもった手紙を何通も頂いて、本当に嬉しゅう思うようになります。」

『大月町史』は、大月町教育委員会で購入している。

一部三千円（送料五九〇円）残部僅少。

当館では本年度より、戦時下の庶民のデータ収集を始めましたが、福吉さんも、戦争回想記「あれから五〇年」をお出しになられましたね。

「この構想はねえ、以前からもっておったんです。町史の軍事編関係を研究したこともあって、町内の特攻基地のことなど、情報はかなりもっていましたが、中国戦線で、病死した戦友の屍衛兵を務めた時の思い出など、自身の強烈な戦争体験もありました。それと、戦後五十年を区切りにして、

来年から地元の慰霊祭や、よその戦友会が取り止めになるということを聞いて、危機感を感じたこともきっかけでしたね。

僕は日頃から、「えらい学者の論文は残っても、庶民の声は残らない」と考えておりましたから、あの惨めで、なんちゃあじゃなかった戦争の歴史だけは、きちんと形にして残さないかんと思った訳です。そこで、大月町内の三十人程に依頼状を出しました。その内、少なかったけど十八人から手記を頂くことができました。実際、何の肩書きもない方達ばかりで、戦争の痛み、苦しみを体に刻み込んでいる人しか書けない、貴重な証言を記録できたと思います。



この本は今年、それも八月十五日までに完成させると価値が半減する思う

て必死にやりました。「大月町史」発刊間近の最も多忙な時期だっただけに大変でした。本自体は赤字覚悟の自費出版じゃけん、ちゃちなもんやけど、心ある人々の反響を呼んだようです。出版直後は、購入申し込みの電話が鳴りっぱなしやったです。今は本当につくって良かったと、女房ともども喜んでおります。」

最後に、今後の抱負などお聞かせください。

「『大月町史』と『あれから五十年』によって、一応、僕の郷土史研究三十年の集約はできましたが、まだまだやりたいことはいっぱいあります。今、頭の中にあるのは、古満目の歴史をもう一度書くこと。歴史的な重厚なものをね。これは、故郷に対するお土産として、かなりのものを是非残したいと思っています。それから何とんでも土佐の水主よ。地検帳にあれだけの記載があるのに、どうして他に資料がないか不思議でたまらん。中世末期の水軍の部将、大月の依岡源兵衛や三浦一族、特に、大月の尻具におった長谷部善右衛門のことはもつと調べたいねえ。僕は土佐の歴史の中で、水軍と水主の果たした役割は相当大きかったと考えています。とりあえず、山内家の長帳（慶長十四〜十六年）から、名古屋城普請に対する、城石切り出しの

詳細な記録（特に水主関連）がないか調べろうと思っています。

あと、余力があれば、町内の石碑の調査もしておきたい。約六十個くらいもあるろうか、石碑の写真と由緒をまとめたら面白いと思います。月山神社の上がり口にある道しるべや、柏島にある藩政期の窮乏を伝える経塚、橋浦のほうそうの供養碑など、どれも貴重な資料やけん。」

僕はねえ、歴史を学ぶ一人として、常に評論家になつたらいかんと思うちよる。実際に現地に足を運んで、人の話を聞き、具体的に記録する。地味やけど大切なことじゃと思うねえ。ずうつと家の中において研究できりゃしよい。けんどもそんなもんじゃないけん。最後に、自分の生まれた故郷の歴史にこだわっていききたいと思うてます。あんたらあも、ええ資料が出てきたらコピーをくれたよ。（笑い）」

今日は長い時間どうもありがとうございました。

今回のインタビューを通じて、故郷をこよなく愛し、少年のような純粋な心で歴史と向き合っている、氏の研究姿勢に感銘を受けると同時に、好きであることの意義を改めて考えさせられた気がする。これからも氏の研究活動に注目してゆきたい。（文責 野本）

掘見文書の一例

岩原 信守

当資料館が佐川町掘見家から寄贈を受けた掘見文書は、藩政時代佐川深尾家の家臣であり豪農であった掘見家に伝わった文書類である。その内容は現在調査中であるが、これまでに調査した文書のうち、最も年代の古いものを紹介する。これは田地売買に関する文書で、①は下分村土田（現須崎市下分）の市川左平次が、滞納した年貢納付に当てるため、所有地を売ることを代官に依頼したもの。②はその土地を上郷村（現須崎市上分）の太郎吉が入札し、横目所の役人が証明したもの。③は田地売券状である。なお、この土地は後に掘見家の所有となったものと思われるが現段階では確認できていない。

右之通私去秋分之御年貢未進方。指當テ売申筈。御座候へ共、自分之才覚。違無御座候間、如何様共御売立被成可被下候。重て一言之御断申上儀無御座候。仍指出如件

市川左平次 兩判

天和三年亥ノ四月十三日

安並孫右衛門殿

市川左平次 兩判

天和三年亥ノ四月十三日

安並孫右衛門殿

市川左平次 兩判

天和三年亥ノ四月十三日

安並孫右衛門殿

市川左平次 兩判

天和三年亥ノ四月十三日

安並孫右衛門殿

市川左平次 兩判

天和三年亥ノ四月十三日

安並孫右衛門殿

市川左平次 兩判

天和三年亥ノ四月十三日

安並孫右衛門殿

市川左平次 兩判

天和三年亥ノ四月十三日

安並孫右衛門殿

右之田畑御賣物方。御売被成候。付右直段。永代買可申候。以上
亥ノ四月廿九日 須崎上郷村 太郎吉

(裏書)

表書之田地七反卅四代式歩之代米拾六石式升五合七勺落札。相違無之所也

天和三年五月十二日

(横目所) 吉松八右衛門

市川左平次田地売券状

一田地七反三拾四代式歩 田方居屋敷

代米拾六石式升五合七勺

外。太米老石式斗 田地仕付造用

右は土田村左平次相立申成年御賣物拾三石六斗九升相滞申。付、扣ノ田地七反三代式歩御代官所迄指上ケ、則安並孫右衛門殿御廻文入札被仰付候処、掘明井畠三拾壹代共都合七反三拾四代式歩、亥ノ四月廿九日。永代之望。て貴殿入札。落申。付、則田地居屋敷共坪付入札之通引渡、右之代米并田地仕付造用米共拾七石式斗式升五合七勺田地之仕付入目共只今請取、御賣物御公儀向、左平次方相立、古未進其外御蝦様米立用米相申候。則御横目所吉松八右衛門殿御裏書有之貴殿入札相添此度相渡し申候。右田地之儀堅口御賣物未進方并諸立米。田地被召上、入札。て御私被仰付候故、少も構無御座候。若

構等御坐候は我等共罷出急度埒明御旁苦かけ申間敷候。仍て田地売券状如件
天和三年亥ノ六月廿九日
下分庄屋 与右衛門 兩判
年寄 七右衛門 判
同 忠右衛門 判
所横目 吉左衛門 判

上郷村 太郎吉殿

右之田地七反三拾四代式歩、前書之通御公物相滞。付田地指上ケ候故召上入札。申付、其方望通永代落札。相極所相違無之候。此田地。付御公儀向、不及申、外方障有之間敷候。若違乱候ハ、急度申付埒明可申候。以上

同日 御代官安並孫右衛門 兩判

上郷村 太郎吉殿

注(1) 代 一代は六歩、五十代で一

反。

(2) 断 辞退、取り止め。

(3) 兩判 印判と花押。

(4) 太米 吉米よりも干害水害に強いが味は劣る。

(5) 横目 今の警官のような役職。

(6) 三拾壹代 差出に無かつた分。

(7) 仕付造用米 種粳。

(8) 仕付入目 植付に要する費用。

(9) 立用米 年貢米の一部を現金に換算して納める分。

(10) 構 差し支え、故障。

(11) 違乱 苦情。

① 差出

一地高七反三代式歩 私抱地居屋敷山

林共

三拾五代 畠屋敷共

六反拾八代式歩 田方

内五反 土田之前六反地ノ内当口

忒反。付吉米老石四斗宛但先

年ハ忒石四斗五升□米候へ共

近年及如此候

近及如此候

② 入札

下分ノ内土田 一地三拾五代式歩

屋敷但山林共

同 六反地ノ内一同五反 田方

同 西 一同忒反拾八代 田方

同 センタンヤシキ一同七代 畠

同 同上、一同拾壹代 八タ

同 同上、一同拾三代 八タ掘明

同 地高七反三拾四代式歩

同 但山林ハ地懸リ分ハ無入目

代太米拾六石式升五合七勺

博物館の本

全国的に博物館の数が増え、博物館が身近なものになってきました。それとともに博物館のイメージ、そして博物館自体が大きく変わろうとしているようです。今回は、高知の書店でも手に入りそうな本を中心に最近の博物館の本をいくつかご紹介しようと思います。

博物館はどんな所で、どんなことをしているのだろう。そんな疑問をもった方には『博物館の楽しみ方』（千地万造著 講談社現代新書 六五〇円）がおすすめです。資料を受け入れ展示するまでの過程や博物館で行なわれているサービス活動の内容、いろいろな種類の博物館の紹介など、博物館のアウトラインがわかりやすく書かれています。博物館の仕事の中身を具体的に知りたい人には、『美術館・博物館は「今」』（湯本豪一編 紀伊国屋書店 一九八〇円）があります。「集める」「みせる」「調べる」など博物館の仕事、実際に担当している学芸員たちが本音で語っています。華やかな外観の裏に隠された厳しい現実と多くの問題が浮かび上がってきます。

館の姿を知るためには、『改訂版 博物館学Ⅰ』（大塚和義著 放送大学教育出版会 二一六〇円）があります。第1刷から改訂版がでるまでわずか四年、しかもサブタイトルは「多様化する博物館」に変わり、成長し変化し続ける博物館の状況をレポートしています。

近年の博物館は、中世の屋敷や江戸の町並を展示室内にそっくり再現したものやマルチメディアを導入したものなど、最新の技術の急速な発展にあわせて大きく変化しています。ともすれば技術にふりまわされることにもなりかねません。そんな時、博物館の使命とは何だったかを確認する本として、『ひらけ、博物館』（伊藤寿郎著 岩波ブックレット 三五〇円）があります。たまに訪れる場所としての博物館ではなく、市民が学習活動の本拠地として活用する博物館。これはひとつの理想ですが、高知県内でも年々博物館は増え、博物館が身近になってきました。みなさんに身のまわりの博物館を利用されることをおすすめするとともに、私たちも、利用しやすい博物館をめざし少しずつでも前進していきたいと思えます。

（梅野 光興）

一城田コレクション 第二次寄贈資料一

小鍛冶車・助六・こけし

企画展「おもちゃー遊びのかたち」の初日、天神や土佐風、河童の面など色鮮やかな郷土玩具の前で城田楠子さんが目を細めておっしゃいました。

「義父が集めた人形がね、たくさんの人に見てもらって喜んでるように見えますよ。家に残っている人形も寄贈しましょう。」

楠子さんは郷土玩具の収集家、故城田政治さんのご子息のお嫁さんで、郷土玩具を愛しむ城田政治さんの姿を真近にご覧になってきた方です。

現在当館で保存している城田さんのコレクションは貴重な郷土玩具の宝庫です。ただ、その中には九両一揃のうち一両が欠けた愛知県の東照宮の山車



歴民スポット⑧
野鳥のレストラン

のようなものもありました。しかし今回、その一両「小鍛冶車」を楠子さんが寄贈下さり九両見事に揃いました。また伏見人形に、歌舞伎十八番物の姿を象った成田屋人形が三点あり、コレクション中には「暫」しかなかったのですが、今回の受贈資料には残りの「助六」「矢の根」も含まれています。また、こけしも多数いただきました。

「二〇年前の寄贈の際に、義父にお願いして手元に残してもらった人形だけど、今度寄贈して義父も喜ぶと思いますよ。」と楠子さん。

企画展を機にご寄贈いただいたこれらの玩具により、城田コレクションは更に充実したものとなりました。（中村）

受付右側の扉を開けて外に出ると、野鳥のレストランがあります。十二月頃から二月頃までの寒くて餌が乏しい時期を中心に開店しています。メニューは、みかんや米で、お客さんはツグミやメジロ、山鳩などです。屋根や柱が緑色をしたおしゃれな店構えが好評で、二月の終わり頃には、うぐいすもやって来て、春の訪れを告げてくれます。

（中村）

1～3月の催し物

〔企画展〕		
2.9～3.20	土佐藩主山内家の名宝Ⅰ	土佐山内家歴史資料の高知県への寄贈、寄託を記念して歴代藩主関係の名品のかずかずを紹介します。
〔講演会〕 午後2時30分～4時30分 聴講無料 葉書にてお申込下さい(定員先着100名まで)		
3.2(土)	山内家文書研究の意義と課題	大野充彦先生(高知学芸中学高等学校教諭)
〔子ども歴史教室〕 電話にてお申込下さい(定員先着30名まで親子連れ可)		
3.9(土)	山内家の宝物と高知城見学	歴史館内の企画展を見てから高知城内外の見学を行ないます。(バスを利用します)
〔講座〕 (午後2時～4時。当日受付。聴講無料。定員100名まで)		
3.16(土)	仁淀川の川船	中村淳子(当館学芸員)

〔ニュース〕

運営審議会委員が決定しました。

会長

岡本健児(前高松短期大学教授)

副会長

山崎 浩(文化財専門事務理事)

委員

秋澤 繁(高知大学教授)

大脇保彦(高知大学教授)

窪内隆起(テレビ高知常勤監査役)

宮村憲章(高知新聞社芸部長)

鍵岡正謹(文化財団理事)

市川精香(高知県議会議員)

山本忠道(総務部副部長)

石田正俊(教育次長)

〈敬称略〉

〔来年度企画展予定〕

土佐藩主山内家の名宝Ⅱ

四月一九日(金)

五月一九日(日)

〔来年度特別展予定〕

新発見考古速報展'96

九月一五日(日)

十月六日(日)

秀吉と桃山文化

―大阪城天守閣名品展―

十二月十二日(木)

平成九年一月二六日(日)

〔出版物のご案内〕

●「死と再生の文化」

さまざまな資料によって、死の文化を多角的に紹介する企画展の展示解説資料集。則武海源氏の「チベットの人々の生と死」、資料調査員等の葬送・盆習俗調査資料集を掲載。

(B5版 二〇八頁 定価一〇〇〇円)

●「城田政治氏寄贈コレクション目録」

郷土玩具を中心とした城田コレクションの目録。城田政治氏の高知新聞連載「おもちゃ風土記」を掲載。

(B5版 六〇頁 定価六〇〇円)

●「研究紀要」第4号

「遊び調査報告集」資料調査員／「淡路・讃岐・阿波・伊予・土佐の国分二寺跡文献目録」岡本桂典(編)／「天の神論」梅野光典

(B5版 一六〇頁 定価六〇〇円)

●「ものがたり考古学―土佐国辺路五十年―」

高知新聞に岡本健児氏が連載した、「高知・ひとの歴史―小・中学生の考古学―」全一〇〇回を一部書き改め、考古学の立場から高知県の歴史をわかりやすく紹介。野市町兎田八幡宮の絵画銅剣について新たに書き下ろしている。

(A5版 三三四頁 定価二八〇〇円)

●「土佐歴史の遺品」

土佐の歴史上の遺品・名勝を解説付きで文庫本にしたもの。

(A6版 一六四頁 定価九八〇円)

〔歴史館日録〕

月 日	出来事
平成七年	
一〇月二〇日	企画展「土佐歴史と刀剣」開幕
一〇月二二日	史跡巡り「四国民家村をたずねて」
一〇月二八日	企画展講演会
十一月一日	子ども歴史教室「岡豊城跡たんけん」
十一月三日	史跡巡り「池川神楽」
十一月二六日	企画展閉幕
十二月九日	子ども歴史教室「火の苦むかし」

〈ひとこと〉

歴史も開館して六年目を迎えようとしています。平成八年度の企画展を楽しみにしてください。(下村)

戦時中の庶民資料を収集しています。寄託・寄贈していただける方はお電話下さい。(野本)

◎曾我学芸員にベビイが誕生しました。名前は「珠子ちゃん」です。(中村)

平成八年一月一日	編集・発行	高知県立歴史民俗資料館
	〒783南門市岡豊町八幡1099-1	
	TEL 0888(62)2211	
	FAX 0888(62)2110	
開館時間	午前9時～午後5時	
	(入館は午後4時30分まで)	
休館日	毎週月曜日(祝日及び振替休日にあたる場合は火曜日)	12月28日、1月4日
入館料	大人(18才以上) 400円	
	団体(20人以上) 320円	
	高校生以下は無料	
	療育手帳・身体障害者(1・2級)手帳所持者とその介護者(1名)、高知県長寿手帳所持者は無料。	
	印刷・川北印刷株式会社	